続・新出の六十六部奉納経

小山正文

一

当研究所の『所報』第七号において筆者は、天文二十三（一五五四）年の六十六部奉納経を紹介したが[1]、その後あらたに滋賀県仏縁寺にも学界未知の六十六部奉納経が、経筒と共に遺存することを龍谷大学の平松令三氏より教えられた。そこで筆者は早速同寺におもむきそれらを実査[2]したので以下報告し、あわせて管見に入ったその他若干の六十六部史料を紹介しておこうと思う。

仏縁寺は滋賀県東浅井郡浅井町郷野にあって真宗仏光寺派に属す。寺伝によるともと天台宗であったが、宝徳年間（一四四九ー五二）真宗に改宗し了明の開基という。江戸時代のものながら今に臨終仏（阿弥陀絵像本尊）、在家仏（光明本尊）を伝存し、かつては絵系図まいりも行われた当地方独特の宗風を伝える村落寺院である。しかし、問題の六十六部奉納経は『法華経』であり、かつその書写年代ものちに明らかとなるごとく仏縁寺が真宗に改宗したという宝徳以降に当てられる点などから、元来これが同寺と直接関係するものでないことが考えられる。はたして『滋賀県の地名』によれば[3]、この経を納める大永三（一五二三）年銘の経筒は、仏縁寺に隣接する柏堂（かやどう）神社の所伝と明記している。いずれにしても該奉納経が、仏縁寺や柏堂神社の存在する郷野の地にかかわるものであることだけは、動かすことのできない歴史的事実といえよう。

ところで、周知のごとく『法華経』は八巻二十八品よりなる。仏縁寺現蔵の六十六部奉納『法華経』も書写当初は、当然全八巻そろっていたのであろうが、永年の間に糊離れや虫食いなどによって失われ、今はわずかに巻第一序品第一の断簡五十六行[4]（八・八×三四・二センチ）（図版一）、同巻方便品第二の断簡百二十七行[5]（九・〇×六八・六センチ）（図版二）、同じく方便品第二の断簡七十一行[6]（八・八×三八・九センチ）（図版三）、巻第二譬喩品第三の断簡七行[7]（八・八×五・二センチ）（図版四）、

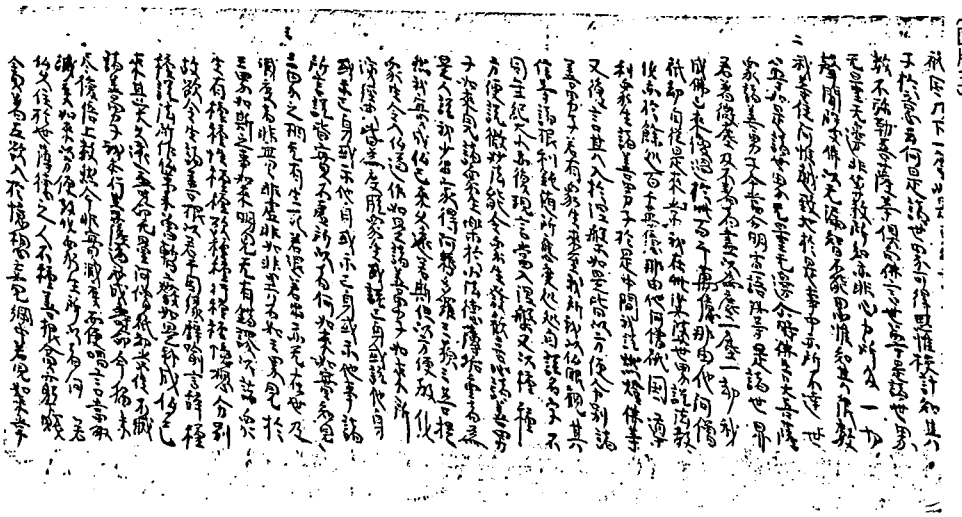
〔図版一〕

〔図版二〕

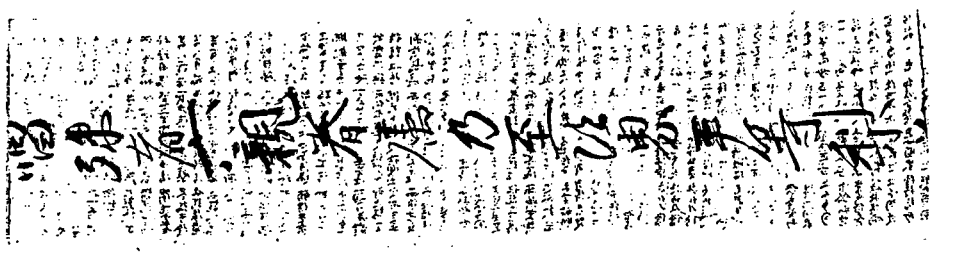
〔図版三〕

〔図版四〕

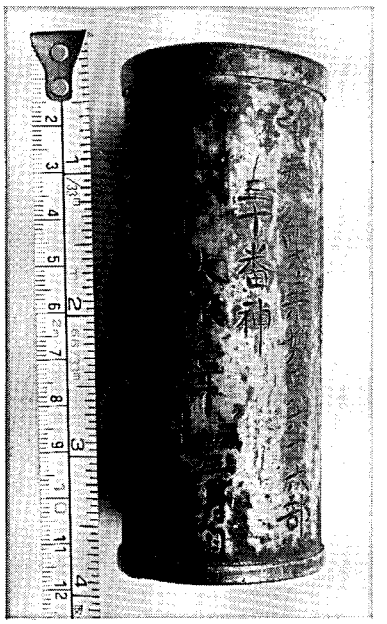
〔図版五〕



〔図版六〕

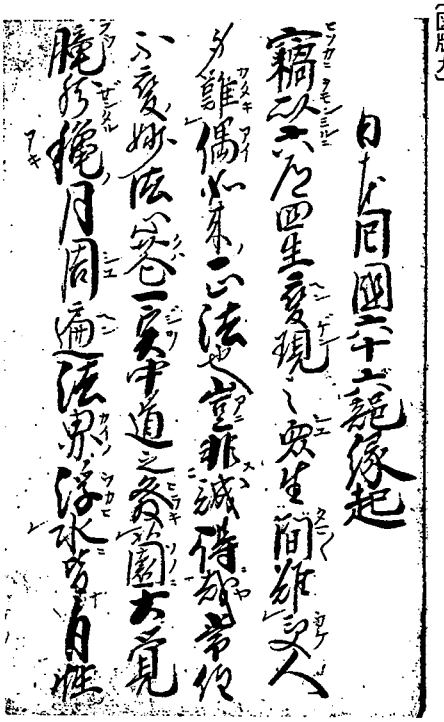


〔図版七〕



〔図版八〕

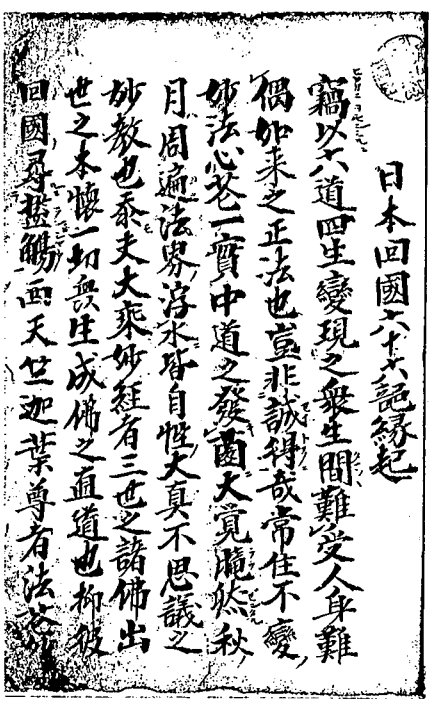
〔図版九〕



日本回國六十六絶縁起

竊以六道四生變現之衆生間難受人身難
偶如来之正法也豈非誠得哉常住不變
妙法心経二實中道之發菴大覚朧然秋
月周遍法界浮水皆自性大真不思議之
妙教也泰夫大乘妙経有三世之諸佛出
世之本懐一切衆生成佛之直道也抑彼
回國尋盤鶴西天竺迎葉尊者法経

〔図版十〕



日本回國六十六絶縁起

竊以六道四生變現之衆生間難受人身難
偶如来之正法也豈非誠得哉常住不變
妙法心経二實中道之發菴大覚朧然秋
月周遍法界浮水皆自性大真不思議之
妙教也泰夫大乘妙経有三世之諸佛出
世之本懐一切衆生成佛之直道也抑彼
回國尋盤鶴西天竺迎葉尊者法経

そして巻第六の如来寿量品第十六、分別功徳品第十七、随喜功徳品第十八、法師功徳品第十九の一巻分[8]（八・八×二四四・七センチ）〔図版五〕を残すだけとなっていることが、困難な復原作業の結果明らかとなった〔追記参照〕。しかしながら六十六部回国聖の奉納経は、経筒のみを遺存して中味の経巻がほとんどの場合失われている現在、たとえ残欠本であろうとも保存良好な仏縁寺のそれは、まことに貴重な新史料といわねばならないであろう。なお、本経の筆者ならびに書写年代については、現存部分に明記するところがないが、このすぐあとで触れる経筒銘よりそれを明らかにすることが可能となっている。

仏縁寺奉納経に関し今一点注意しておきたいのは、巻第一序品第一の断簡裏面に「……唱殊者六親眷属乃至法界平等梨（ママ）益……」という文字がみえている事実である〔図版六〕。これは写経者の願意の一端を示す没却しがたい裏書であって、さきに紹介した天文二十三年奉納経のそれと共にきわめて珍らしい実例といえよう。[9] 残念ながら文はわずかにこの数文字しか残っておらず、また現存の他巻にもこうした裏書はないので、筆者の願意を十分くみとれない面もあるが、ともかく本経はかかる点からも今後注目すべきひとつの史料になろうかと思う。

二

仏縁寺六十六部奉納経の価値をなお一層高からしめるのは、これを納入している大永三年銘の経筒が現存することにある〔図版七〕。その経筒は島根県大田市大田南八幡宮をはじめ全国各地からこれまでに二百四十点以上も確認されている室町後期十六世紀の典型的な銅製円筒形のもので、総高十一・四、被式蓋高一・〇三、同径四・七六、筒身高十・九七、同径四・六、同円周十四・四、底高〇・三〇八、同径四・七五五各センチを計測し、筒身高は筒身径の約二・三倍である。これらの数値はいずれもすでに指摘されている永正・大永（一五一五～二三）年間期における六十六部奉納経筒の規格によく適合する。[10]

この経筒の蓋の上面にも他の多くの例と同様蓮華文が陰刻されている〔図版八〕。それは二重線で雲状に縁取りされた子房内に中心へ一個、周囲に五個と八個の総計十四個の蓮子を置き、子房の外線に接して単弁八枚を配し、その各弁には五本の線が入り、さらに弁と弁の間に三ないし四本の線を刻む間弁八枚を挟み、そして外縁に添って点線状の縁取りがなされるという形式のものであるが、なにぶん径五センチ弱程度のふくらみをもった円内一杯にそれを刻むせいもあって、全体に精緻さがなく力強さにも欠ける作品となっていることは否み難い。

銅板を丸めた筒身胴体部の接合は、一センチ弱の舌留め三ヵ所によって行われており、底部も筒身下部二ヵ所から造り出された〇・六センチ程の舌を別鋳の円形底板切り込み穴にさし入れ折り曲げて固定している。これらの手法もすべて型にはまった当時のやり方である。

なお、底面以外鍍金が施され今もそれがよく残っているところから、

内部納入経巻の保存の良好さと相俟ち本経筒が、他の大多数のそれのように野外の納経施設や土中に埋納されたものでないことを物語っており、あるいは初めにも記した柏堂神社の本殿内部にでも納められて、今日に至ったことを想像せしめるのである。

さて、問題の筒身面に陰刻されている銘文であるけれども、これまた型どおりの内容ながら通途の三行形式ではなく五行からなり、一部異体文字も使用されているが、次のごとく明瞭に読み取ることができる。

江州小谷住聖恆運　（恆＝快）
十羅刹女
（梵字バク）奉納大乗妙典六十六部
三十番神
大永三年癸三月日

すなわちこの銘文より本経筒は、室町後期の大永三（一五二三）年三月、近江国浅井郡小谷（現滋賀県東浅井郡湖北町小谷山辺）に居住していた六十六部奉納回国聖の快運が、奉納したもののひとつであることが知られよう。この事実はとりもなおさず経筒内に納入の前記『法華経』も、同じころ彼の手によって書写されたことを示唆する点で、右の銘文は重要な意味をもつものである。

この近江国の快運という聖名は、当時の六十六部史料に出てくる出雲国の快俊、大和国の快養、播磨国の快円、紀伊国の快賢[11]、伊賀国の快順[12]などと類似していて興味深く何か関係あるかも知れないが、彼らが実際「大乗妙典」すなわち『法華経』を文字通り六十六部書写し、それを全国六十余州の霊場に奉納したのかどうかについては、彼らの名を記す経筒なり経文が目下のところおのおの一点のみしか発見されていないので何ともいえないのが実状といえよう。

ところで、快運の住所小谷には、神亀二（七二五）年泰澄大師開基という真言宗小谷寺があり、同寺には弘長三（一二六三）年銘の重文指定孔雀文磬、天正四（一五七六）年、同十九（一五九一）年の秀吉文書も伝えられている。ことによると快運は同寺の住僧ではなかっただろうか。いっぽう小谷といえば誰しも想起するのが、有名な戦国大名浅井氏の居城小谷城であろう。浅井長政（一五四五―七三）の祖父亮政（？―一五四二）が、近江国守護京極氏の内紛に乗じて同家の重臣上坂信光を失脚させ江北統一に成功したのは、実に快運の経筒銘と全く同じ大永三年三月のことであった。この事象の背後に思い合せたいことは、薩摩の同じ戦国武将島津忠良（一四九二―一五六八）が、家国繁興長久のため『法華経』を一国に六十六部、すなわち全国六十六ヵ国に総計四千三百五十六部、巻数にして実に三万四千八百四十八巻ものそれを神力なる聖に二十二年間もかけて奉納回国させた史実である。[13]想像をたくましくすれば、あるいは快運も神力と同様浅井亮政の命で奉納回国の行脚に出たことも考えられ、それは同時に間諜の任務も背負わされたものであったかも知れない。天正六（一五七八）年織田信長（一五三四―八二）が、関所通行御免の特権をもつ高野聖千三百八十三人を大量処刑したのも、彼らの

中に隠密をはたらく者がいたからであったともいわれている。[14] もっとも快運の場合は、さきにみた納入経巻の裏書より「六親眷属乃至法界平等梨（ママ）益」を願っての奉納であったようであるから、右はあくまでも単なる臆測にすぎないことはいうまでもなかろう。

なにはともあれかくのごとくここに奉納年月、奉納聖の明確な経筒が、全巻完存していないものの奉納経と共に新しく出現したことを喜び、これが今後六十六部史料のひとつとして注目されるようになれば幸いと思う。

三

六十六部史料については、東海大学教授関秀夫博士の二大労作『経塚遺文』・『経塚の諸相とその展開』にほとんど網羅されていて、われわれは多大の恩恵にあずかることができるのであるが、しかしその後も新史料が少なからず見出されているので、管見に入ったものだけを次に掲げておきたい。

六十六部の基礎的史料は、いうまでもなく奉納経とそれを納入する経筒にある。前者についてはすでに紹介した愛知県本證寺蔵の天文二十三（一五五四）年伊賀国名張の快順奉納経と今回の滋賀県仏縁寺蔵大永三（一五二三）年近江国小谷の快運奉納経の二点が、注目すべき新出史料であり、後者に関しては同じく右仏縁寺のもの以外、なお数点を追加しうるかと思う。

まず第一は山口県新南陽市高瀬の三汲寺に所蔵される天文二十四（一五五五）年の銅板製鍍金、六角宝幢形、総高十一・六センチという経筒で、次のような銘文をもつ。[15]

十羅刹女　防𡚁之住呂善慶
（釈迦坐像）　奉納經王六十六部聖
三十番神　天文廿四年今月日

第二はやはり三汲寺所蔵のもので、総高十二センチの右と同形品だが、紀年の刻入をみない。[16] ちなみに六角宝幢形の六十六部奉納経経筒は、現在五十点弱ほどしか確認されておらず、その円筒形経筒との比率は一対五の割合であるから、[17] 三汲寺の二点は珍重すべき遺品といえよう。

十羅刹女　武𡚁之住了光
（釈迦坐像）　奉納經王六十六部
三十番神　當年今月日

第三は同じく山口県徳山市長穂の龍文寺に蔵せられる三汲寺経筒と同様の六角宝幢形式のものであるが、仏像を刻まず代りに梵字（バク）を入れる。弘治二（一五五六）年の銘文があり、十一・五センチの総高を測る。[18]

十羅刹女　越後國住侶空源
（梵字バク）　奉納大乗妙典六十六部聖
三十番神　弘治二年今月日

第四は茨城県勝田市馬渡の大沼経塚遺跡より、ごく最近発掘された天文十（一五四一）年銘の円筒形経筒である。[19] この経塚は国道二四五号線沿いにあって二基よりなる。塚はおのおの四角形で十四～五メートル四方もあり、経筒は二号塚の頂上より六十センチのところから出土した。青銅製で鍍金が施され、高さ約十センチ、径四・三センチ。蓋には宝相華文が刻まれているが一部欠損する。内部には一巻の経文が炭化した状態で泥土と共に入っていることが確認された。経巻は次掲のごとき経筒銘より『法華経』であることは確実であろう。

十羅刹女　常忍住道白
（梵字バク）　奉納大乗妙典六十六部
三十番神　天文十年八月日

第五はやはり茨城県の西茨城郡岩瀬町飯淵より出土し、現在同町教育委員会の所蔵となっている銅製円筒形の経筒で、総高十・二センチ、径四・五センチ。銘文中「十羅刹女」の「羅」、「三十番神」の「番」の字が、それぞれ梵字であらわされているのは大変珍らしい。[20]

十（梵字ラ）刹女　當是住證海
（梵字バク）　奉納經王六十六部
三十（梵字バン）神　當年今月日

第六は同じ茨城県東茨城郡小川町山野犬塚前九五六より、一九一二年ごろに発掘されたと伝える銅製円筒形のやはり無紀年経筒である。高さ八センチというから、他例に比しやや低いゆえ若干欠損部分があるかも知れないが、径は通例のごとく四センチと報告されている。[21]

十羅刹女　越前住善良
（梵字バク）　奉納經王一國三部
三十番神　當年今月日

第七は大正六（一九一七）年十一月四日に京都の高等家政女学校で開催された『第三回大蔵会陳列目録』上262に掲載されている小川白楊氏所蔵のものである。[22] 高三寸一分（九・二センチ）、底径二寸四分（七・二センチ）と記されているので、やはり円筒形経筒と分るが、底径は事例に照し一寸四分（四・三センチ）の誤植であろう。銘文は続けて書かれているうえ釈迦の種子（バク）もみないが、復原的に示しておく。現在所在不詳。

十羅刹女　佐忍住泉藏坊
（梵字バク）　奉納經王六十六部聖
三十番神　當年今月日

以上の七点と仏縁寺の一点を加えた計八点が、関博士以後管見に入った六十六部聖奉納経筒で、形態上よりみると六角宝幢形式のものが三点、円筒形式のものが五点となり、うち紀年を有するのは仏縁寺の大永三（一五二三）年円筒経筒、勝田市出土の天文十（一五四一）年円筒経筒、三汲寺の天文二十四（一五五五）年六角宝幢経筒、龍文寺の弘治二（一五五六）年六角宝幢経筒の四点である。国別では山陽道の周防、東山道の近江、東海道の武蔵・常陸、北陸道の越前・越後・佐渡となるが、これ

だけ地理的に離れていても経筒の形式、銘文の書式には一定の様式が存していることが分り、回国聖が文字通り全国版で動いていた事実を知ることができて興味尽きないものを覚えるのである。

六十六部に関する史料としては、奉納経や奉納経筒のほかにも供養碑や笈あるいは納経請取状などもあるので、若干目についた中世のそれらについても列挙しておこう。

兵庫県淡路島の千光寺は、洲本の淡路富士先山にある島内きっての観音霊場で、延喜元（九〇一）年の草創というが、同寺には今も鎌倉時代文保二（一三一八）年の銘を有する納経鉄塔の一部分が存在しているところからもよく分るとおり、早くより六十六部聖が回国納経する霊場であった。中世におけるそうした同寺の殷賑ぶりは、千光寺参詣曼荼羅で手に取るごとくみることができるが[23]、興味深いのはその曼荼羅下方の釈迦堂正源庵境内にたつ一基の石碑であって、碑面に次のような銘文が刻まれているのである。

六十六部聖江忍一幻

（梵字　胎蔵界五仏）

大永六丙戌十一月吉日

すなわちこれは大永六（一五二六）年十一月、近江の六十六部聖一幻によって建立された供養碑であることが明瞭で、絵画資料とはいえ貴重なものといえよう[24]。

次にあげておきたいのは、六十六部聖が背負った笈の銘文である。聖たちは回国のさい多くの奉納経筒をはじめ仏像・仏具・仏器・経巻・縁起等々を笈に入れて背負い現世安穏・後生善処を願いつつ何千里もの道を歩いたのであった。そうした笈がさまざまの伝説と共に今も各地にいくつか残されているが、その中には工芸品として非常にすぐれた作品もすくなくない。東京国立博物館蔵の木製黒漆塗金銅板装塔輪宝文笈（高七〇・〇、幅五六・七、奥行二九・七センチ）もそうしたもののひとつで、次掲のごとき墨書銘より弘治二（一五五六）年のものと知られ重要美術品に認定されている[25]。

十羅刹女　上野□　〔左側面墨書〕

（梵字バク）奉納法花六十六部　〔背面墨書〕

三十番神　弘治二年八月　〔右側面墨書〕

六十六部聖は各地の霊場に納経を済ませると、そのことを証明する請取状を寺社よりもらうのを常とした。それは回国聖に六十六部経の奉納を依頼する施主や旦那が、多くの場合別に存在したためであろうと思われる。したがって請取状の原物も若干残っているが、ここに紹介するのは三重県名張市赤目町長坂の延寿院に所蔵されている永禄七（一五六四）年正月のまことに珍重すべき板木原版である。同院は赤目四十八滝のある役行者修行地で、古くは砂金山黄滝寺と呼ばれ、鎌倉時代から六十六部経が奉納されてきた不動明王の霊場として著聞するところとなっている。版木は縦三十、横四十七、厚五センチで、その全文は次の通りである[26]。

夫以當山者大聖明王之淨刹行者靈
瑞之開基也魔王降伏法場鎮護國
家勝地村里遠而爲無傾動人倫離乎
自爲寂靜是以仰窺青山巖崛砌含
空裏慧日伏臨黃瀧淵冷浩吐水底
朗月普賢景趣自然刹土也依之一結
緣之族預生々加護一敬禮之輩得
世々給仕肆卜奉納梵閣祈現當安
樂就中一國陸拾六部希代不可思
議伏願有緣無緣同沐經王法雨敷
心蓮有情無情等蒙法華力用遊
寂室
仍一國六十六部請取如件
伊賀國名張郡　黃龍山
永祿涙年㊀正月吉日　別當（花押）

四

六十六部納経聖は、奉納する『法華経』の功徳利益の広大なることを喧伝するために、鎌倉幕府を開いた源頼朝（一一四七―九九）の前生が、頼朝坊という六十六部聖で、彼はその回国納経の善根によって、今生で征夷大将軍になりえたことが説かれている『六十六部縁起』を人びとに語り聞かせ、諸国勧進の旅を続けたのであった。こうした説話は室町時代前半に成立した『太平記』や『三国伝記』にもすでにみえているところなので、おそらくその譚の源泉は鎌倉末期にまで遡及し、東国出身の六十六部聖たちによって言出され流布したものと思われる。[27] 六十六部聖はいうまでもなく全国を移動するから、彼らが使用する『六十六部縁起』も内容的に似て非なる本がいくつか生じても一向不思議はなく、げんに中世・近世のものを含め次の四、五種類の『六十六部縁起』が確認されている。

㋑　『六十六部縁起』

日光市輪王寺に室町中期を降らない現存最古の写本が蔵されており、[28] 慈眼大師天海（一五三六―一六四三）の蔵本である。[29] いっぽう横浜市称名寺の神奈川県立金沢文庫にも、天海蔵本の後半部分と若干字句的異同がみられるも同一内容の断簡一紙があって、やはり室町中期の写本と認められている。[30] 金沢文庫ではこれを『法華堂縁起』と称しているが、『六十六部縁起』の断簡とするのが正しい。ちなみにこの断簡裏面には「社寺交名」と名付けられているものが書かれているが、[31] これも正しくは「六十六部国付納所付」とでも称すべきものであろう。いずれにしても㋑は古態を残す中世の重要な『六十六部縁起』であるが、これが直接同じ中世の『太平記』や『三国伝記』にとられている六部縁起に当るのかといえば、実はそうではないことを知っておく必要があるかと思う。つまり

中世成立の『六十六部縁起』にもさまざまの種類があったのである。

㋺『六十六ド縁起』

大津市叡山文庫所蔵の『法則集』（真如蔵―二五―一六四）と題される書物に収載されるもので、㋑とは同名異本である。[33]この『法則集』は「仏生会讃」・「炎讃」・「児汀法則」・「順修法則」・「観音入仏」・「不動入仏」・「薬師入仏」・「六地蔵讃」・「橋供養」・「鐘楼讃」・「仏名経法則」・「堂供養并王五尺」・「塔供養」・「常行三昧法則」・「法花三昧法則并縁起」・「六十六部縁起」の十六章からなる主として諸法要の表白文集で、中に常陸国吉田郡遠廐郷西光寺の名がみえるところより、これがその地方で集められたものであることを暗に教える。したがって所収の『六十六ド縁起』も同じく東国で作られたとするのが自然であろう。叡山文庫の『法則集』は浄教房実俊（一六一八―一七〇二）の書写になるから、『六十六ド縁起』も当然かれ以前の成立となり、㋑本にやや後れる室町末期ごろのものとみて大過なかろう。

㋩『日本回国之縁起并国付納所付』

現在知られている『六十六部縁起』の中で、ただひとつ著者が下野国河内郡新里村（現栃木県宇都宮市新里町）の住人念西と分るもので、十八世紀初頭に大坂より版に付された。[34]刊記に「大坂御城追手錦町弐丁目菊屋勘四郎板行」とあるも刊年を持たない。しかし版元の菊屋勘四郎は他刊本より元禄・享保ごろに出版活動をしていたことが分っているので、大坂を中心とする上方の元禄町人文化華やかなりし時にこれも出版されたわけである。文治政治のもと封建社会を正面から批判できなかった人びとは、この期における農業生産・商品経済の発展に伴い巡礼にことよせての回国納経の旅を楽しんだとしても不思議はなかったであろう。この『縁起』の出版は次の㋥と共にそうした要望に応える形のものであったかも知れない。しかも『縁起』の作者が㋑や㋺に近い東国下野の人である事実も看過しがたいところである。本『縁起』の刊本は東京都立日比谷図書館加賀文庫、[35]大谷大学図書館楠邱文庫[36]にそれぞれ一本が蔵せられているも意外に伝本が少ない。

㋥『大乗妙典納所六十六部縁起』

本『縁起』は元禄三（一六九〇）年に初版が印行され、その後続いて宝永五（一七〇八）年、安永六（一七七七）年、寛政五（一七九三）年、文政五（一八二二）年、同八（一八二五）年と何度も版が重ねられたものだが作者は不詳である。[37]これも㋩と同様回国納経者用に刷られたことは、『縁起』の後に「一国一宮国分寺霊場一国三部納経所」・「西国三十三所」・「坂東三十三所」・「秩父卅四所」・「四国八十八ヶ所」・「日本二十二社」・「日本五山」・「日本大山」・「日本大川」・「志本（しほ）のミ（み）ちひの事」・「日本海陸寒暖国之図」・「十句観音経」等々を付しているところからも十分窺知でき、殊に『縁起』本文右横に平仮名で書下し文を添え、読（よみ）縁起調としている点にそれがよくあらわれている。頼朝の転生譚を中心にした『縁起』を六十六部聖が読み上げ語り聞かせる行為は、すでに触れたとおり中世以来の伝統と思われ、㋥本は端的にそれを示すものといえよう。

第四刷の文政八年本には、次のような刊記があって、㋩本と同じく上方は京都の出版物であったことを告げる。ちなみに大谷大学図書館には、宝永五年・文政五年・文政八年の各刊本を蔵する。[38]

元禄三庚午歳九月新刻
文政八乙酉歳春四刻
京都室町四条下ル町
諸宗御経師書林　鈴木半兵衛

㋭『日本回国六十六部縁起』

近世における『六十六部縁起』は、当然のことながら何も㋩や㋥の刊本だけが行われたわけでなく、写本も少なからず現存している。いま管見に入ったそれらをあげるならば、大谷大学図書館楠邱文庫の「享保六辛丑年後文月九日夜戌時書之／凛閼廿サイ」という奥書を有する享保六（一七二一）年本、[39]ここに翻刻する架蔵の享保十七（一七三二）年本〔図版九〕、長野市茂菅の頼朝山静松寺蔵の天保十三（一八四二）年本、[40]本研究所の渡邉信和氏より恵与された架蔵別本〔図版十〕などがある。しかしながらこれらはいずれも刊本㋥系統に属するから異本というわけではないが、さりとて刊本を直接写したものでないことも字句の異同より知られるので、あえて別立した次第である。

㋥・㋭の成立時期を中世とするか近世に置くかは難しいところであるが、やや信頼しがたい記述ながら静松寺の天保十三年本に天正十五（一五八七）年の本が破損したため再写したという奥書があることをこのさい注目するのも一案であろう。㋥・㋭系統の『縁起』が、㋑・㋺に続く中世末近世初の成立とみても別段不都合はないものと思うからであるが、いかがであろうか。今後の課題としたい。

以上、現在知られている『六十六部縁起』につき概観したわけであるが、最後に㋭の架蔵享保十七年本を翻刻しておこうと思うので、その書誌を簡記しておく。

①巻冊数　一巻一冊
②成立時期　中世末近世初期ヵ
③編著者名　不明
④書写年代　享保十七（一七三二）年
⑤筆者名　松川団九郎ヵ
⑥装訂　袋綴
⑦表紙　茶系色布製（平成三年新補）
⑧寸法　縦二十三・八センチ　横十六・四センチ
⑨紙数　十二枚
⑩半葉行数　五行
⑪一行字数　十二～二十字
⑫外題　なし
⑬内題　六十六部縁起
⑭首題　日本回国六十六部縁起
⑮尾題　なし

⑯転声等　返点・送仮名・振仮名あり

⑰奥書　于辰享保十七稔壬子八月諦迅写
書置茂胖（かきおくもかたみ）となる連（れ）や筆の跡
吾幻し筆ハ
千歳よ

⑱備考　内表紙裏に次記のごとくあり
越後国蒲原郡白川郷水原河北勝田村
松川団九郎用之

本稿を草するにあたり、龍谷大学の平松令三氏、大谷大学の名畑崇氏、東海大学の関秀夫氏、実践女子大学の牧野和夫氏、同朋大学の小島恵昭氏、同朋学園佛教文化研究所の渡邉信和氏、滋賀県仏縁寺の角川誠氏、三重県延寿院の松本篤明氏等々に大変お世話になった。記して謝意を表し擱筆する。

註

(1) 拙稿「新出の六十六部奉納経」（『同朋学園佛教文化研究所報』七）一九九一年五月。
なお、本誌を借りて右拙稿の補訂を行っておく。八頁上段右の茨城県玉造町出土の経筒銘は、左の鹿児島県加世田市出土のそれと全く同文であることが左書によって知られたので訂正する。
関秀夫『経塚とその遺物』（『日本の美術』二九二）一九九〇年九月　至文堂　六五頁。
同じ八頁の〔第一巻裏書〕の「快□」は、「快印」と判読する。一〇頁上段左の『春華秋月抄』は、『春華秋月抄草』の誤りであるから訂す。

(2) 一九九一年八月八日、当研究所の小島恵昭所員・渡邉信和研究員の両氏と共に実査した。

(3) 下中邦彦『日本歴史地名大系』二五　一九九一年二月　平凡社　九七〇頁。

(4) 岩波文庫本『法華経』上　二四頁三行目～三六頁一二行目。

(5) 〃　〃　〃　六六頁七行目～九八頁九行目。

(6) 〃　〃　〃　一一四頁五行目～一三二頁八行目。

(7) 〃　〃　〃　一三四頁一行目～一〇行目。

(8) 〃　〃　下　一〇頁～一二六頁。

(9) 六十六部奉納経にこのような願意文をしたためている例としては、享禄二（一五二九）年の下野国壬生住僧静遍奉納経（栃木県下都賀郡石橋町橋本念仏原鎧塚出土）、永禄五（一五六二）年の雲州之住華重房奉納経（島根県安来市飯生町愛宕山出土）が存するのみとなっている。
関秀夫『経塚遺文』一九八五年九月　東京堂出版　二六三頁・三〇一～二頁。関秀夫『経塚の諸相とその展開』一九九〇年一月　雄山閣出版　四五三頁・四五一頁。

(10) 松原典明「六十六部聖の奉納経筒にみる規格性について―大田南八幡宮奉納経筒を中心として―」（『MUSEUM』四六〇）一九八九年七月。

(11) 註9の『経塚遺文』二二五頁・三〇五頁・三一〇頁。

(12) 同『経塚の諸相とその展開』四二一頁・四三一頁・四三二頁。

(13) 註1の拙稿に同じ。

(14) 泰円『日新菩薩記』（『戦国史料叢書―島津史料集―』所収）

(15) 五来重『増補＝高野聖』一九七五年六月　角川書店　二六八頁。

(16) 内田伸『山口県の金石文』一九九〇年六月　マツノ書店　八一頁。

(17) 同右　八二頁。
関秀夫『経塚の諸相とその展開』四三八頁に円筒形経筒の遺物一三六点、四四一頁に六角宝幢形経筒の遺物四三点とあるから、およそこのよう

な割合となるわけだが、その傾向は十六世紀の流行期においても変らなかったであろう。

(18) 註16に同じ。

(19) 『月刊文化財発掘出土情報』一〇七　一九九一年一一月　ジャパン通信社　三〇頁。

(20) 栃木県立博物館『中世への旅―聖と俗のあいだで―』　一九九〇年一〇月　栃木県立博物館　一一六頁。

(21) 『小川町史』上巻　一九八二年三月　二〇〇頁。

(22) 大蔵会『大蔵会展観目録』　一九八一年一一月　文華堂書店　六一頁。

(23) 大阪市立博物館『社寺参詣曼荼羅』　一九八七年一二月　平凡社　一四六頁。

(24) これが今も現存しているのかどうかは未調である。なお近世におけるこうした六十六部聖供養碑は、全国いたるところでみられる。

(25) 東京国立博物館『東京国立博物館図版目録―仏具篇―』　一九九〇年六月　東京美術　番号四四六。

(26) 延寿院副住職松本篤明氏のご教示による。

(27) 『六十六部縁起』については次の諸論が詳しい。

Ⓐ湯之上隆「中世回国聖の一形態―金沢文庫古文書五二四五号「社寺交名」をめぐって―」(『東海地方の前近代的交通形態と地域構造の特質に関する基礎的研究』　昭和六十年度科学研究費補助金研究成果報告書)　一九八五年。

Ⓑ湯之上隆「頼朝転生譚の生成―唱導説話形成の一齣―」(『静岡県史研究』四)　一九八八年三月。

Ⓒ小嶋博巳「研究ノート　六十六部に関する二、三の覚書」(『生活文化研究所年報』一)　一九八七年五月。

Ⓓ小嶋博巳「六十六部縁起と頼朝坊廻国伝説―六十六部研究ノート・その二―」(『生活文化研究所年報』二)　一九八八年二月。

Ⓔ小嶋博巳「頼朝坊の笈とその掟書―六十六部研究ノート・その三―」(『生活文化研究所年報』四)　一九九〇年一一月。

Ⓕ牧野和夫「叡山文化の一隅(海彼敦煌並びに民間信仰の影)―掌篇類の紹介」(『叡山の文化』所収)　一九八九年六月　世界思想社　九八～一〇八頁。

Ⓖ矢野恒雄「日本回国六十六部聖の研究―牟礼・三水村を中心に―」(『長野』一五七)　一九九一年五月。

Ⓗ小林計一郎「善光寺と六十六部」(『長野』一五七　一九九一年五月。

(28) 左の図録にその一部の写真が掲載されている。佐野美術館『頼朝と鎌倉文化』一九九一年一〇月　佐野美術館　三三頁。

(29) これの本文は註27Ⓑおよび Ⓓに掲載されている。

(30) 『金沢文庫古文書』九　仏事篇下所収　文書番号六七七九号。

(31) 金沢文庫古文書番号五二四五号。

(32) 渋谷亮泰『昭和現存天台書籍綜合目録』下　一九七八年六月　法蔵館　一一四六頁下。

(33) 『縁起』の全文は註27Ⓕに翻刻されている。

(34) 関秀夫『経塚の諸相とその展開』　五五五頁。

(35) 『國書總目録』六　一九六九年四月　岩波書店　三七九頁。

(36) 図書番号　余大八〇六一

(37) 註35に同じ。

(38) 図書番号　余大三一五二(宝永五年本)・余小一四九(文政五年本)・余大七一一五(文政八年本)。註27Ⓓに大谷大学図書館蔵宝永五年本、文政五年本の読み下し文が掲載されている。

(39) 図書番号　宗大一一七三三。

(40) 註27Ⓔ参照。

〔追記〕断簡状の仏縁寺奉納経は、そのご巻第六・巻第一・巻第二の順で巻物化された由をご住職角川誠氏よりうけたまわった。保存の途が構じられたことを読者と共によろこびたい。

（1表）

六十六部縁起

（1裏）

越後國蒲原郡白川郷水原河北勝田村

松川團九郎用之

（2表）

日本回國六十六部縁起

竊以六道四生戀現之衆生間難レ受人身難レ偶如來ノ正法也豈非二誠得一哉常住不變ノ妙法心苔一実中道之發レ菌大覚朧然穐ノ月周遍法界浮レ水皆ナ自性大眞不思議之妙教也忝大乘妙經者三世諸仏之出世ノ本懐也一切衆生成仏之直道也抑廻国尋二ニ濫觴一西天竺迦葉尊者法花妙典書二梵字一納二実業一崛一其後竜樹菩薩無量壽經名二回國經一始テ行ヲ震且羅什

（2裏）

（3表）

三藏写二妙典漢字一安二置白馬寺一又善道和
尚名二同国一始行本朝大日如來因二御示現一
名二同国修行一始天智天皇一行給ハ其後文武
天皇行給慈覚大師櫻嚴院ノ椙ノ洞ニ結草
庵一天長六年六月十日始メ之一千日ノ間六時行給
故ニ天人來下与二不死甘露一證如法如說
之妙行閻浮提中第一ノ善願廣大無
返之徳本也日本文武天皇ノ御宇迨ハ三十
三ケ国也餘小国也枠勅二行基菩薩一爲二六十
六箇國一然者五幾内五ケ国表二五智ノ如來一

（3裏）

（4表）

中國十六ケ国ハ表二十六善神十六大菩薩一關東八ケ
國ハ表二胎藏界八葉曼荼羅一筑柴九ケ国
表二金剛界九會ノ曼荼羅一四国四ケ国表二多聞・
持国・増長・廣目一南海道六ケ国表二六觀音一東
海道十五ケ国表二弁才天十五童子一北陸道七ケ
国ハ表二過去七佛一三ノ嶌ハ表二佛法僧ノ三宝一天智天王
始給以來續而白道上人行観上人三光上人慈覚
大師自レ夫レ頼朝坊奉レ納所之妙典六十六部之願
主也日本国中廻國修行之依二大功徳一植二種二善本一
不レ歴二多劫多生一今現二新日本太守開基大將

（4裏）

（5表）

軍右兵衛佐源ノ頼朝ト旦那吉平ト云者指レ笈ヲ奇
進ス因テ其縁ニ今現ス悪源太義平ト又中宮ト云人
御經莊嚴之旦那タリ今中宮ノ太夫進朝長ト生
是也備レ膳之旦那平太夫者今大膳ノ太夫廣
元是也去者本願主頼朝坊共ニ以上十六人也内
順縁聖弐人有則時正坊今北条ノ四郎遠江
守時正是也同聖景時坊一錢半紙之依レ為二
勧進ノ聖一爲二侍ィ惣司一梶原平三景時是也
此逆縁聖リ有二十三人一壱番者義經坊源氏
大将太夫判官九郎義經ト現ジ給二番者兼

（5裏）

（6表）

廣坊今間塩十郎権守兼房三番武藏
今武藏坊弁慶是也四番重宅坊今鈴木
三郎重家是也五番吉盛坊今伊勢三郎
吉盛是也六番清重坊今駿河次郎清重
是也七番常陸坊今常陸坊海存也八番弘經
坊今源八兵衛弘經是也九番兼高坊今鷲尾
十郎兼高也十番法界坊今片岡八郎法界也
十一番次信坊今佐藤四郎次信也十二番忠信坊
今佐藤三郎忠信也十三番ニ重清坊今亀井
六郎重清也此拾三人之逆縁聖リ頼朝坊一味

（6裏）

（7表）

同心西国三十三箇国奉レ納御経然ニ於二中国安
藝国嚴嶋一義景坊与二景時坊一爲二大口論一
本願主頼朝坊ノ背二下知一大願失二本意一東シ
三十三ヶ國不レ納二御経一故ニ於東國武藏国盡ニ果ニ
其身ヲ自然亡也雖レ然ト一度ノ結縁依レ不レ空
本願頼朝ト一所ニ生ル為メ制セン平家ノ悪行一修羅
道ノ為二大将軍一天下泰平諸願成就ヲ為也去程ニ
發ニ兵西国一凌二山川岳多悪難一追二罰シ強敵一渡ル
四國一時於二攝州渡ル一逆艫ノ故義経与梶原ト
爲二口論一依二其意恨一景時頼朝讒言シ終ニ

（7裏）

（8表）

亡ニ義経一事是前生之顕ス因果一所也去者逆
縁聖十三人奥刕平泉ノ庄。高舘建二御所一意ロ
一ニシ守二護者義経一ヲ露ニ悪因悪報一所也此又
近江国ノ住人佐々木四郎高綱從二鎌倉殿一
日本半国之賜ニ御代官一ヲ雖レ然ト諸国諸士
不レ随ニ下知一依レ之ニ熊野那智山ニ一七日有リ参
篭ニ此事深ク祈ル満ル夜之暁天飛龍權現
御示現云ク所望不レ可レ叶自リ是關東伊豆ニ
下向シ可二百日参篭一慥可レ有レ冥夢一蒙ニ御示現一
自リ是レ關東伊豆下リ奉二参篭一當二七十三夜一暁神

（8裏）

（9表）

新アラタニシメシテ示云ク汝所望不レ可レ叶其故ハ頼朝前生同国
聖ノ時法花六十六部之内三十三部雖レ有二助成一心
願奇進御經七部也不レ満二二十六部ノ願一故ニ諸候
人民不レ随ハ其證據者伊豆ノ川辺大キ成ル塚有レ之
來八月朔日雷電震動シテ大風大洪水ノ時
彼ノ塚可二裂破一然ルニ其時睹レ塚ヲ可二分明一ナル然致
彼ノ節一如レ件彼ノ塚崩裂塚ノ内有二銅ノ筒一筒ノ中頼
朝坊旦那帳有リ帳面奉レ納法花六十六部ノ内
七部之旦那近江国之住人有二高綱一前生ノ宿業
拙キ恨ミ子息千法師七歳ノ時譲レ家發心紀伊

（9裏）

（10表）

國登二リ高野山一送ル一生一也爰又武藏国住人秩
父畠山庄司次郎重忠前生蜂也頼朝坊
經納書写之時大ナル熊蜂飛ビ來リ硯ノ縁渡ル料
紙蹈穢其時筆ノ軸撓不二思奇一被二打刹一
深ク乖レ哀憐一踏穢足ノ跡黒キヲ則チ經文ノ字直ニ威神
之力巍々如是普門品之唱文ニ依二其ノ功德一今生ニ
重忠一然ニ重忠過去ノ依レ縁仕二頼朝一有時勤番
之時有二子細一將軍爲二重忠心引見一為二女姿一
密奇リ給重忠不レ知二其心一思フ是レ平家ノ郎
等悪七兵衛景清可レ成頃日取リ分ケ窺レ君ヲ由

（10裏）

(11表)

也何様女替レ質討レ君ヲ思イ謀リト奉レ討事是悪縁
悪報露顕所也去程一度値遇一度結縁不
レ朽生々世々之善因善果悪因受二悪果一依レ去修
得ノ大功仁現在ノ報二悪因一悉ク盡二無上道一大佛果也
右大將頼朝不思不覚逆縁報了業根ニ至ル迨上
品上生ノ蓮臺。成ホ正覚也然ニ同國納經ノ功德
無量無邊ノ大德不レ盡妙經也五十展轉功德
過二五波羅蜜ノ行一皆人無レ疑處レ奉レ納メ御經
現當二世ノ大願皆令満足決定得脱安樂
自在者也乃至法界平等利益

(11裏)

(12表)

海なきハ山城大和伊賀河内筑紫ゑ筑後
丹波ミゆさか
あふミぢや美のひだ信濃甲斐の国上野
野州ハ是ハ海なし
右之國海なくして山国なり
于辰享保十七稧壬子八月諦迅寫
書置茂胖とな連や筆の跡
吾幻し筆ハ
千歳よ

(12裏)